洪水はわが魂に及び

新潮社版

洪水はわが魂に及び
下巻

●著者 大江健三郎 ●発行者 佐藤亮一
●印刷所 二光印刷株式会社 ●製本 大口製本 ●発行所 株式会社新潮社
郵便番号162 東京都新宿区矢来町71番地
電話東京 03(260)-1111 振替東京808番
昭和48年9月30日発行 昭和48年11月5日3刷
定価820円

©Kenzaburô Ôe Printed in Japan 1973
落丁本はお取替えいたします

洪水はわが魂に及び　下巻・目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

第十三章＝「縮む男」の審判　7
第十四章＝「鯨の木」の下で　31
第十五章＝逃亡者・追跡者・残留者　53
第十六章＝性的な微光にむかって(一)　77
第十七章＝性的な微光にむかって(二)　102
第十八章＝性的な微光にむかって(三)　126
第十九章＝鯨の腹の中より(一)　150
第二十章＝鯨の腹の中より(二)　174
第二十一章＝鯨の腹の中より(三)　197
第二十二章＝大水ながれきたりて我がたましひにまでおよべり

洪水はわが魂に及び　下巻

第十三章　「縮む男」の審判

遠い戸外で、訓練する者らの叫び声がしていた。屋内の気温はあがり、毛布もなにもかけぬまの躰が汗ばんでいる。しかも気温とは別の、たしかな熱源が存在していて、それがさらに汗をよびおこす。勇魚（いさな）はその熱源をおしやろうと掌を伸し、逆に小さな熱い掌に押しかえされた。ジンが病気にかかっているという認識の電撃が、かれを一瞬はっきり眼ざめさせた。ジンが勇魚のさしだす言葉あるいは愛撫を拒むのは、その肉体が病んで苦しい時よりほかにありえないのである。

――ジン、暑いのか？　痛むか？　ジン、ジン、病気なのか？　と、憐れにさしせまってくる声で勇魚はささやきかけた。

ジンは黙っていた。しかもその沈黙のうちに幼児が眼ざめてすでに永いあいだ、その孤独な体内の異常にむかいあってきたのだということが感じられる。「縮む男」が、これもあきらかに勇魚よりまえに眼ざめて機会を待っていた者の冷静さで、しかし口腔にピンポン玉をふくみこんでいるような障害感とともに呼びかけてきた。

――なぜ電燈をつけないんだ？　外は真昼だぜ、もう燈火管制の意味はないよ。

スイッチをおした勇魚が、布で囲われた光の円錘体むけてひきかえすと、そのただなかに眼を

つむっているジンの顔は唐辛子みたいに真赤で、柔らかい髪は汗に頭蓋骨のかたちをあらわして皮膚にはりついている。そのジンにむけてにじりよってきた「縮む男」が、これまた発熱している幼児同様異物めいた衝迫力を勇魚におよぼさずにはおかなかった。かれの頭の総体が腫れあがって、胴から直接生えだしているようなのだ……

——これは病気だよ、熱の匂いがするから。しかし、まずおしっこさせてやらなければならないぞ、と「縮む男」は眼脂だらけの腫れた瞼のあいだから勇魚をすかし見ていった。

勇魚はぐったりしているジンの躰にすくみこむような思いで手をふれると、放尿させに立って行ったが、昨夜来ずっと排泄していないジンの尿がもの悲しいほどわずかな量なのだ。脱水症状をおこしているのにちがいない。

——「自由航海団」に医者の卵が参加しているよ。「ボオイ」の病気の時からその必要を感じるようになって、ひっぱりこんであるから。そいつに見せなければならないよ。

——きみ自身も手当てを受けなければならないな、と勇魚はいった。

——オレハ、モウ回復スルツモリハナイ、と「縮む男」は決然としていった。

勇魚はすぐ戻ってくるむねを幼児にテレパシイでつたえようとしたが、ジンは衰弱した咳をひとつしながらしかめた瞼の下に他者をもとめているのではない眼をひらいたのみで、すぐまた眼をつむってしまった。

——開けてくれ。喬木(たかぎ)に話があるんだ、と勇魚は襲われて救助をもとめるようにあわただしく声をかけた。すぐに開いた扉をまったく盲になりながら強い陽光のなかに出たかれは、狭いベランダで平衡をうしなった。脇腹を硬いものに支えられてやっと立ちなおり眼をこらすと、階段に片足を踏まえてのけぞった多麻吉がライフル銃の銃身を突き出しているのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

――撃たれると思って眼をつぶったのかね？　と多麻吉はある執拗さをあらわして嘲弄した。

勇魚は黙ったままベランダから降りるほかなかった。正面の灌木群の向うに熔岩礫斜面を見あげ、昨夜のヤマモモの木をあらためて見出して方向感覚を把握しなおす。同時にかれはヤマモモの「樹木の魂」に、幼児ノ熱ヲ鎮メテクダサイと頭の奥の声で祈っていた。多麻吉がライフル銃を肩にかついで歩く後について、勇魚は昨夜摺り足で歩いた小道をひきかえし、板で崩れる熔岩礫をせきとめた段だんをくだった。かれらは大型トラックが自由に方向転換できるほどの広さの整地された場所にむかって降りて行ったのだが、広場の西側をその中央に谷のような通路をあけて囲んでいる、両腕にあまる大きさの火山弾壁が眼ざましかった。黒ずんだ赤紫色の火山弾のいちいちから、まことにさかんな陽炎が立ちのぼっている。

――通り雨が過ぎて行ったんだよ。陽にあたって熱くなった石がそれを蒸発させているんだ、と多麻吉がいった。

降り立った広場の北側面の高みに、勇魚が夜をすごした山荘が鳥籠みたいにひっかかっている。それは倉庫の造りの二階建て事務所の三階として、しかし斜面にじかに載せられていた。海に向ってくだる灌木の原生林を南に見て、真東の正面にもうひとつ飯場風の大きいプレハブ建築がある。

――喬木よ。あんたに用事だといってるよ、と広場を大股に横切って行った多麻吉が、開かれているそのプレハブ建築の扉口を土足のまま踏みこえて呼びかけた。小走りにつづいて行った勇魚は、土間の右奥の一段高くなった畳敷きに喬木が机に向っているのを見た。勇魚もまた声をかけ、喬木がかれにむけて顔をあげた瞬間、その斜め横の板壁が勢いよく割れて、陽光のただなかの屋外炊事場が見え、そこからランニング・シャツだけの半身を覗かせて伊奈子が叫んでよこした。

――どうしてジンを連れてこないの？　眠ってるの？

——病気なんだよ。発熱していることしか正確にはわからないんだが、と勇魚はいった。
——それじゃドクターをつれてくるわ。いま訓練している班につきそっているからね。
——いや、伊奈子は炊事をつづけてくれ、と喬木がいうのを聞きざま、かれの脇から訓練に消耗して横たわっていたのであろう若者がひとり躰を起した。よし、おまえドクターを呼びに行ってくれ。
——ドクターは「自由航海団」の船医なのよ。どんな病気でもわかるわ、本当に医学部にいたんだから、と伊奈子が勇魚を力づけた。待つあいだに雑炊を食べる？
——ジンと一緒に食べたいんだがね。
——ジンの分は、「縮む男」の食事と一緒に運んで行って、わたしが食べさせるわ。
——おれのほうにも、あんたに見てもらいたいものがあるんだよ、と喬木がいった。「縮む男」の荷物のなかに、あいつのこれまでの作品のスクラップがあったんだ。それをさっきからずっと見てきたんだがな。これをどう思うかね？
——おれはその写真のことをまだ聞いてなかったよ、おれにも見せてくれ、と多麻吉が勇魚よりさきに、大判のハトロン紙封筒へ猿臂を伸した。
——丁寧にあつかってくれ。作品なんだから、と喬木はいった。
勇魚は、伊奈子からごった煮めいた雑炊のどんぶりを手わたされて、さかんにたちのぼる湯気に顔を突っこみ豚の臓物とニンニクの匂いをかいだが、またどんぶりのふちにのせられた割箸を片手で割りもしたが、胃がすっかり縮みこんだかのように絶対に食欲がないのだった。
——おれはな、とくにこの組写真について意見を聞きたいんだよ、と喬木が畳の上に数葉の写真を並べたのをきっかけに、勇魚はどんぶりを板壁の根かたに置いた。

脇から多麻吉が自分でそそくさと見た後でまず手渡した一枚目の写真には、公衆浴場のように広い洗面所のなんとなく例外的に低く感じられる洗面台に、パジャマ姿の子供たちが群がっていた。かれらは顔を洗っているというよりも、むしろ洗面台にしがみついている、あるいはすがりついているのである。写真の前景に、ほかの子供たちにくらべていくぶん年長に見える子供がいる。かれは顎を洗面台の端にのせ、櫂のように平べったい両膝を突っぱって、なんとか上躰を押しあげようとしている。洗面台に懸けられている痩せて長い両腕は、あきらかに無力だ、筋肉をつかうのでなく骨と骨とのかさなりにのみ運動の支点をたくしている困難な押し上げ運動に、いささかも協力していない。ひっくりかえった進行の印象をあたえる、ひとりの少年を三つの時期に分けて写し出した三枚組の写真もあった。もっとも幼い顔つきの少年は、松葉杖をつきながらも自力で立っている。二枚目の写真の、すでに幼さの消えた少年は自分で車椅子を動かして登校するところだ。動きにブレた白いスポークの線が水の飛沫のようだ。そして最後の老成してしまった表情の少年は、かつて歩行したこともなかったかのようにひっそりとベッドのシーツをふくらませている。

――これは「縮む男」が報道写真家協会賞を受けた組写真だ、と喬木がいった。筋萎縮症の子供たちの施設を撮ったんだね、《縮む子供たち》というタイトルだ。それを見つけてしまって、おれは「縮む男」が本当に縮んでゆく人間でないのはもとより、自分が縮んでゆくと信じている気狂いですらもないのじゃないかと、疑いはじめたよ。

――また報道写真家協会賞をとるために、おれたちの組写真を計画して、あいつには縁起のいい筋萎縮症を口実にもぐりこんできたのか？　あの野郎！　と多麻吉は罵った。

――おかわりはどう？　と炊事場から顔を出して伊奈子が呼びかけていた。

――勇魚は伊奈子の雑炊など食いやしないよ。そこにほうりだしてあるよ、と多麻吉が同じ語

調でいった。
——あんたに食べられないなら、ジンにはとてもだめねえ、と伊奈子は途方にくれた憐れな声を出した。
勇魚は急いでこう弁解しないわけにはゆかなかった。
——いや、あまり熱いから、どんぶりがひえるのを待っていただけだ。
そして勇魚が壁ぎわに立って雑炊を食いはじめると、戸外の激しい陽ざしにうたれながら積みあげられた火山弾があげる水蒸気をせおって、若者がひとり駈けてくるのが見えた。ボーイ・スカウトの隊員のまま、二十歳をこえたような若者だ。かれは米軍放出の戦闘服か、あるいはそれを模倣して造られている迷彩服に、戦闘帽までかぶっていた。そしてこれも米軍放出の匂いのする救急箱をさげているのだった。
——喬木、用事だって？　と若者は土間に駈けこみざま、健康な荒い息づかいでいった。しかしともかく頭に水をかけさせてくれ。
そしてそのまま炊事場へ出て行くドクターに、伊奈子がつきしたがって事情を説明していた。
——ジンという子供がいるのよ。「自由航海団」の乗組員はみんなこの子供が好きなのよ。あまり言葉を話さないけれども、耳は神様みたいにいいよ……
すぐにドクターは濡れた頭をタオルでおさえ、しかしそのタオルが水びたしなので、髪をぬぐうというのではなく頭になお水をそそぎつづけている恰好で戻って来た。
——熱があるんですね？　そのほかに咳をするとか、吐くとかいうことがありましたか、とドクターはある専門家らしさをあらわして勇魚に問いかけた。
——いまのところは熱だけです、と勇魚はいったが、素人の観察力の盲点を不安に感じないわ

けにはゆかない。

――こんな季節だし単純な風邪ならばいうことはないけれども、とドクターはいった。

――これまでにジンのかかった病気を話さなければならないのじゃない？　と伊奈子が口をそえた。生れてすぐからジンは酷いめに会ってきたんでしょう？

――いや、いまのところ複雑な情報をあたえられても、おれには実際の処置に生かす力がないよ、と敏感に勇魚の当惑をくみとってドクターはいった。実際に子供を診て考えるほかないんだ。

――ジンが食べるかどうかわからないけれども、雑炊を持って行ってみるわ。水とお湯とも持って行くわね、他になにがいる？

――スープの罐詰があるじゃないか、とドクターはいった。おれたちが食糧の統制管理をしているといっても、それは今度の訓練のひとつにすぎないだろう？

――訓練のひとつにすぎなくても、原則を守ることは必要じゃないか？　いまのところ訓練だけがおれたちの活動らしい活動なんだから、と多麻吉がさえぎった。特別な備品を使う場合は、全体で討論してからということになってるだろう？

――罐詰は伊奈子が自由に使っていいよ、と喬木がいった。

――そのように原則を崩していくうちに、なにもかもが崩れるんだ。それを知ってるのは「縮む男」だけだよ。いまあいつは敵になってしまったがな……

――多麻吉は、そのおまえの敵を連れおろしてきてくれ。意味もなく手荒なことはするなよ。ドクターにジンを見てもらったら、あんたも降りて来てくれよ。伊奈子はスープを作れば、それからずっとジンにつきそっているだろう？

――それじゃ勇魚が水とお湯だけさきに運んでおいてね、と伊奈子は喬木の指示にこたえて生

きいきと躰を動かしはじめながらいった。

ふたつのバケツを勇魚が両脇に提げ、救急箱を持ったドクターとともに飯場の建物を出た。多麻吉ともうひとりの若者はすでに広場を突っきり、黒くこまかな砂埃を蹴立てて板囲いの段だんを駈け上っていた。かれらに遅れて、かれらのたてた砂埃がなおしずまっていない段だんを昇りつつ勇魚は火山弾の壁の向う、はるかな西方に、巨大なケヤキが立っているのを見た。いちめんに陽光を照りかえして輝いている鏡面のような海を背後に、黒ぐろとこまかな翳の大きい群がりをなして晴れた空を覆っているケヤキは一本のように見えるが、中央の老木に、樹幹は細いが高さにおいて劣らず、枝のしなやかな伸び具合はむしろしのいでいる、もう一本のケヤキがかさなりあってそそり立っているのである。ケヤキ群の「樹木の魂」は汗まみれの勇魚の内部に、ある冷えた声を、注意セヨ、注意セヨ！　というコダマの声をおこした。山荘から見張りをしていた若者に、多麻吉ともうひとりの若者が両脇から引っ立て、背後から押しまくるようにして「縮む男」を連行して戻ってくる。ドクターは憤激した声をあげてそれを遮ろうとした。

――ひどいじゃないか、多麻吉。袋みたいな顔になった者を、手あてもしないのか？

陽光のもとで見る「縮む男」の打撲傷におおわれ乾いた血糊までこびりつかせた頭は、実際おそるべきものだった。しかし多麻吉が答えるまえに、眼脂の粒つぶのスダレのあいだから透かすようにドクターを見る「縮む男」自身が、こう叫んだのである。

――生キテイルオレノ手アテヨリ、処刑サレタアトノ検死ヲシッカリヤレ！　デキタラ解剖モシテクレ！

そして面くらっているドクターの前を、「縮む男」はあたかも従者をひきつれてのように悠ゆうと通りすぎて行った。そのまま黙りこんで歩きながらも山荘に入る時には、ドクターはいつの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.